

雑司ヶ谷研究

—— 近隣住民の雑司ヶ谷霊園利用の変化 ——

Zoshigaya Research: Changes in the Use of Zoshigaya Cemetery by Nearby Residents

住居学科卒業生
Dept. of Housing and Architecture

大西 明
Mei Onishi

建築デザイン学科
Dept. of Architecture & Design

葉袋 奈美子
Namiko Minai

抄 録 明治7年9月に開設した雑司ヶ谷霊園は、2024年で開園150周年を迎える。現在は、夏目漱石や竹久夢二など数多くの著名人が眠る空間として認識されているが、霊園として開園する前は御鷹部屋が設置されていたように、時代の移り変わりと共に空間の利用方法も変化していった。本研究では、雑司ヶ谷霊園の歴史の変遷を辿り、人々からどのような場所として認識されてきたのかを明らかにする。近隣住民及び霊園利用者へのヒアリングから、1950～1980年代には虫取りや野球など遊び場として利用されていたこと、2000年代以降は散歩や通勤・通学時など生活道路としての利用が確認できた。雑司ヶ谷霊園は、死者を偲ぶ場というだけではなく、子供時代の記憶を蘇らせる場であり、さらに都会における貴重な緑の空間になっていると言える。

キーワード：雑司ヶ谷、都立霊園、ヒアリング調査、地域コミュニティ、公共施設

Abstract Zoshigaya Cemetery, established in September 1874, celebrated its 150th anniversary in 2024. Today, the cemetery is recognized as a place where many famous people, such as Soseki Natsume and Yumeji Takehisa, have been laid to rest. However, the use of the space has also changed with the changing times, as seen in the fact that a hawk room was established there before the cemetery was opened. This study traces the historical development of Zoshigaya Cemetery and clarifies what kind of place it has been recognized as by the local people. From interviews with neighborhood residents and cemetery users, it was confirmed that the cemetery was used as an area for catching insects and playing baseball from the 1950s to the 1980s, and for daily activities such as walking and commuting to work and school from the 2000s onward. It is not only a place to remember the dead, but also to revive childhood memories and preserve valuable green space in the city.

Keywords: Zoshigaya, metropolitan cemetery, audio survey, local community, public facilities

1. 研究の背景と目的

明治7年9月に開設した雑司ヶ谷霊園（以下、霊園）は、2024年で開園150周年を迎える。東京都建設局によると、青山・谷中・染井霊園において「霊園」と「公園」が共存する空間への再生に取り組んでおり、霊園も再生事業に着手する予定だ。再

生計画には「利用しやすく、親しみやすい霊園を目指して」という目標が書かれているが、現時点で利用者にとってどのような場所であるかということとは述べられていない¹。

本研究では、霊園で過ごした思い出話を近隣住民や霊園利用者から集め、それを元に霊園と周辺に住む人々の生活空間としての関わりを考察する。

表1 ヒアリング調査日程

調査日	方法	対象者
11月1日(水)	対面	雑司が谷案内処(大倉様、栗栖様)
11月7日(火)	電話	鈴の家(花屋)
11月8日(水)	対面	鈴木永年石材店
11月10日(金)	対面	小池陸子様
11月12日(日)	対面	区部都立霊園150周年記念イベント参加者
11月13日(月)	対面	なか山(花屋)
11月15日(水)	対面	藤乃家(花屋)
11月20日(月)	対面	としま案内人(磯田様、音羽様、下島様、森様)
11月22日(水)	対面	秋元(花屋)
11月25日(土)	対面	ラジオ体操の参加者
	対面	松下様
	対面	木村石材店
12月1日(金)	電話	此花亭(花屋)
12月5日(火)	対面	安井百合子様
12月8日(金)	対面	多児貞子様、山口所長
12月26日(火)	対面	座談会(戸張康健様、安井祐司様、高野れい子様、吉野信男様、石田勝彦様、山口所長、表様、小口優子様)

2023年11月から12月にかけて、霊園周辺の石材店や花屋を営む方々を中心に、ゆかりのある方々を対象としてヒアリング調査を実施した(表1)。霊園にどのくらいゆかりがあるか、自身や家族が子供時代にどのように利用していたか、現在はどのように利用しているかといったことを中心に、それぞれの思い出話を伺った。

2. 雑司ヶ谷霊園の概要

霊園は現在の南池袋四丁目に位置する。霊園を中心として、雑司が谷一丁目、雑司が谷二丁目、雑司が谷三丁目、南池袋二丁目、南池袋三丁目、東池袋四丁目、東池袋五丁目に囲われているので、霊園の中を通り抜けることで町間を移動することが出来る。霊園や鬼子母神にはみどりの分布が多く、地域全体では住宅地としての利用が多い。鉄道は、北東に東京メトロ有楽町線の東池袋駅、南西に東京メトロ副都心線の雑司が谷駅がある。

霊園に関連する事柄を表2に示す。関東大震災や東京大空襲による焼失を免れ、広域避難場所としても指定されていることから、災害時には地域の拠点としての役割を果たしている。1970年代に、サンシャインシティの開業や大塚坂下町停留所の廃止といった都電沿線の変化があり、2000年代に入ると

副都心線が開通する。雑司ヶ谷駅や池袋駅へのアクセスが増えるといった人々の移動手段や経路の変化が、霊園内を通り抜ける機会の増加にも繋がった。将軍の「御鷹方御組屋敷」(お鷹部屋)跡地を、明治7年に霊園として整備し、甲乙の2種類の区画が提供された。区画の広い甲種には明治期に活躍した人々が埋葬されている。敷地は、最初から現在と同じ形だった訳ではなく、周辺住民から土地を買い上げることで徐々に拡張していった。図1に示す赤色、黄色、青色の順に拡張していったと考えられる。

3. 住民生活と霊園空間の利用

1) ヒアリング調査概要

ヒアリング対象者には、霊園にお墓を持つ人が少なく、お墓参りとしての利用ではなく、生活空間としての関わりが主である。ヒアリングから抽出された行為や関心事について、利用方法と年代に分けて表3に整理した。図2に空間利用の採集結果を示す。

過去と現在を比較すると、過去の思い出には野球や虫取りといった遊び場としての利用が多く、霊園を身近なオープンスペースとして利用していたことが分かる。イチョウの木を使って三角ベースの野球をしたことや、車通りの少ない道でキャッチボールしたという話があり、霊園内の樹木や道空間を上手

表2 雑司ヶ谷霊園関連年表

年月	内容
1874（明治7）年9月	雑司ヶ谷墓地の開設
1876（明治9）年	東京府への移管
1889（明治22）年	東京市への移管
1923（大正12）年	関東大震災（周辺の宅地化進む）
1935（昭和10）年	雑司ヶ谷霊園に名称変更
1938（昭和13）年	崇祖堂設置 コンクリート塀の設置
1945（昭和20）年	東京大空襲
1962（昭和37）年6月	墓所の貸付停止
1969（昭和44）年	首都高速5号線（都市高速道路5号線）池袋－音羽間開通
1974（昭和49）年	都電の系統一本化
1978（昭和53）年4月	サンシャイン60開業
1979（昭和54）年	広域避難場所として指定
1993（平成5）年	ケーベル会発足
1997（平成9）年	東京都による霊園入口の新設
1999（平成11）年	墓地万年塀の生垣化 「緑のこみちの会」結成
2008（平成20）年6月	東京メトロ副都心線 池袋－渋谷間が開業する
2011（平成23）年	東日本大震災
2023（令和5）年6月	墓所の貸付再開

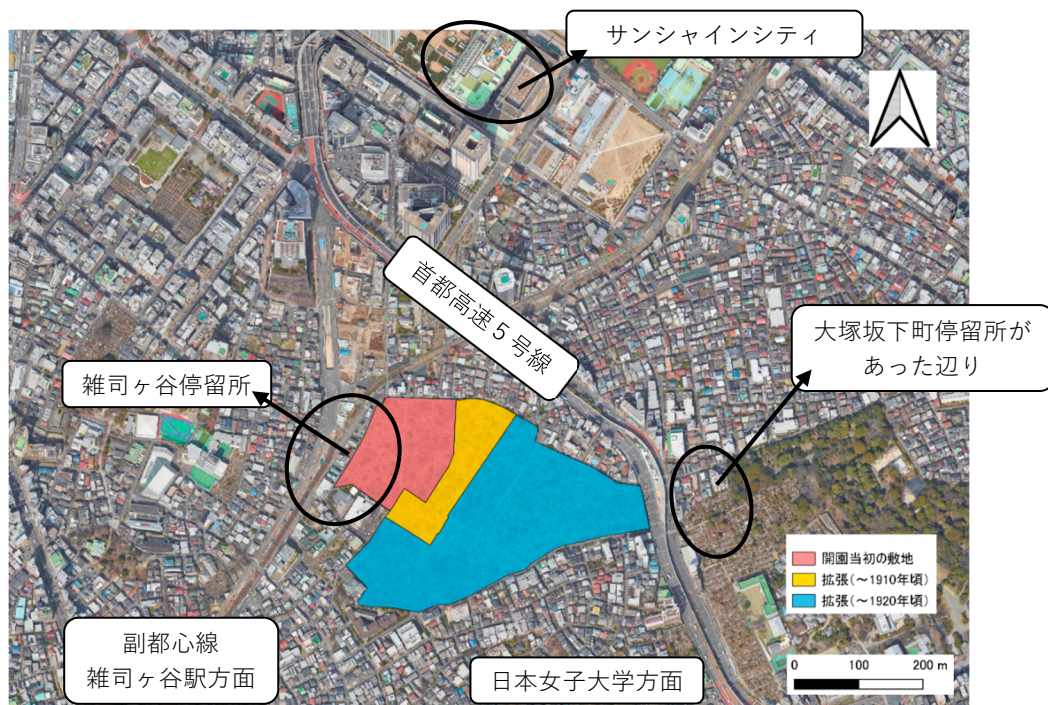


図1 敷地拡張時期（地理院地図より作成）

表3 霊園利用のキーワード

発言者※敬称略	1950年～2000年代	2000年代以降
生活空間・滞留場所としての利用	遊び場（虫取り、野球、凧揚げ、肝試し、鬼ごっこ、かくれんぼ、雪遊び） 銀杏拾い、焚火、花火を見る、自殺者、ホームレスなど	遊び場（虫取り、野球、凧揚げ、肝試し、鬼ごっこ、かくれんぼ、雪遊び） 銀杏拾い、焚火、花火を見る、自殺者、ホームレスなど
動植物の生息・観察管理としての利用	野良犬・猫、タヌキ、カラス、インコ、フクロウ、タマムシ、虫取り（セミ、カブトムシ、クワガタ、トンボ、蝶）など	野良犬・猫、カラス、インコ、鷹、ヘビ、トカゲ、鳥の撮影、苔の採集、植物の手入れ、枯れ葉の掃除など

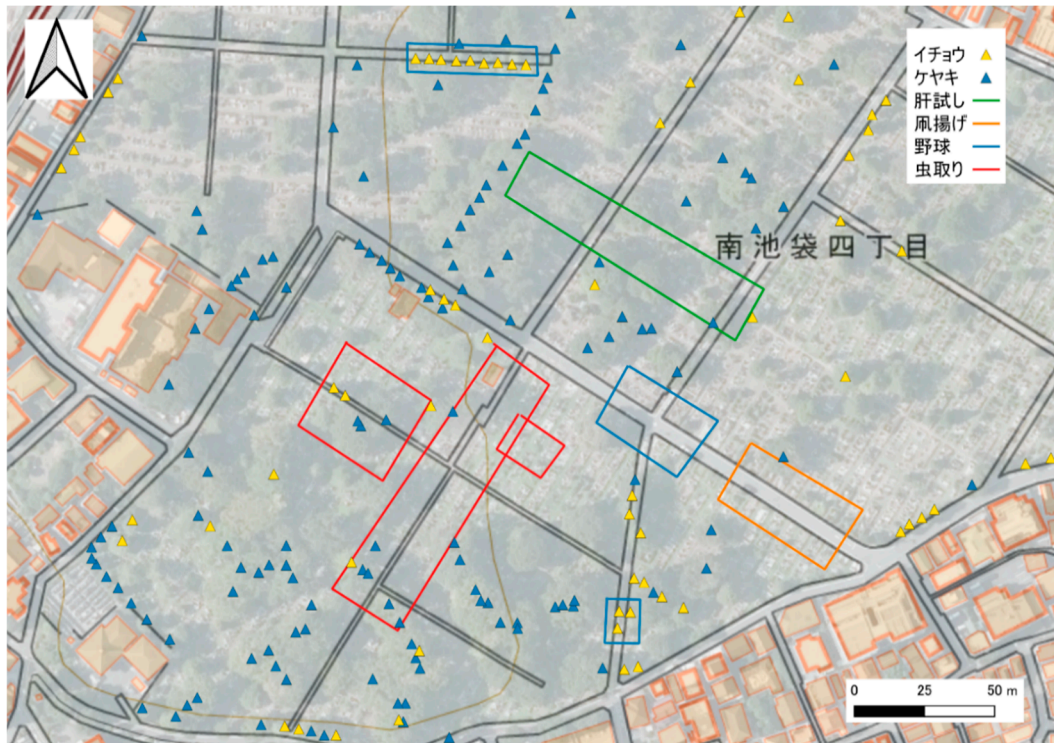


図2 過去の遊びに関わる利用（地理院地図より作成）

に活用して遊びの空間としていたようだ。生き物の生息空間としては、近年も鳥類や爬虫類を見かけたという声があり、鷹が訪れるといった過去に御鷹部屋であったことを彷彿とさせるような指摘も見られた。近年は、散歩や通り抜けと言った移動目的の利用に変化していることから、ヒアリング対象者の年齢が上がったことで利用方法も変化したと推測できる。霊園外周のコンクリート塀が生垣に変わったことで霊園全体の雰囲気が大きく変化したという声も多く挙げられた。

2) 遊び場としての利用

虫取りをしたという話が最も多く、セミやカブトムシ、トンボ、蝶など、現在の公園でも身近に観察できるものが取れていたようだ。カブトムシやクワガタは樹液に集まりやすく、セミは、サクラやケヤキ、マツの木に集まりやすい²。ケヤキの本数が多い霊園には、セミが集まりやすかったと言える。

野球は、いちょうの木をベースに見立てたり、木が低かった頃にやっていたという話が多かったので、樹木の位置や成長速度に影響を受けていたと言える。野球の他に、鬼ごっこやかくれんぼ、ごっこ遊び等

で墓を使ったという指摘が多く、霊園内の「木」や「墓」といった特徴的な空間を遊び場として活用していたことが分かった。

3) 生き物の生息・観察としての利用

遊び場としての利用で挙げられたセミ、カブトムシ、トンボ、蝶など身近に観察できる虫の他に、タマムシといった環境の条件が十分に整わないと生息できない虫もいたようだ。鳥については、カラスが大量にいたとの指摘があった。石原都知事在任（1999年4月23日～2012年10月31日）の間に罠を設置するなどして駆除した。子育て中のカラスに警戒されて襲われたという話もあり、過去の利用で霊園内の散策や通り抜けがあまり挙げられなかったことは、カラスの多さも影響していたと考えられる。野良犬・猫を見たという指摘も多い。保護活動の活発化などにより減少していったが、現在も霊園周辺で暮らしている猫はいるようだ。

4) 生活空間・滞留場所としての利用

自殺者や痴漢のように、ネガティブなイメージがいくつか見られた。樹木の伐採や、コンクリート塀が生垣・フェンスに変わったことで、霊園全体の見通しが良くなり、ネガティブな要素や危険なイメージが変化していったと推測できる。また、ホームレスの生活空間にもなっていたことから、戦後の貧しさといった社会問題が垣間見られる場となっている。コンクリート塀の頃は、霊園周辺の花屋や交番など

が抑止力となり、出入り口付近ではなく、奥の方で痴漢がいたり、ホームレスの生活空間になっていたという指摘もある。

焚火や銀杏拾いのように、住民同士の交流を生む空間としての利用も見られた。落ち葉掃除で集めた落ち葉を燃したという話だったので、落葉樹やいちょうの木など、霊園内の自然資源が住民同士の交流を生むきっかけになったとも言える。

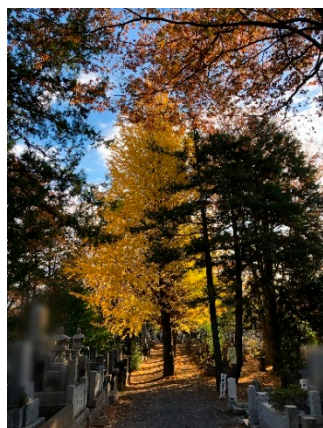
5) 現在の利用

現在では、通勤・通学利用に加え、花を植えて育てる等、霊園の維持管理に関わることで、近隣公園への手入れの参加と類似した形で行われており、ヒアリング対象者の生活の中に位置付けられていることが確かめられた。都電の廃止や東京メトロ副都心線の開業等により池袋へのアクセスのために霊園を通ることが増えたことや、サンシャイン 60 の開業を機に通り返れることが増えたという指摘もあり、周辺の都市整備に合わせた利用の変化も見られた。

過去には、風揚げや鬼ごっこをしたこと等、子供の遊びとしての利用が様々な形であったが、現在はウォーキングやランニングといった大人の移動目的の生活利用が多い。また、ラジオ体操のような健康増進・近隣交流活動に加え、花を植える等の手入れの取り組みが近年の特徴である。つまり、霊園内の道は、その場を通り抜けるためだけに利用されるのではなく、その場に留まることや、交流のための場であると言える。



ラジオ体操実施場所 朝 6 時 30 分～
(2023 年 11 月撮影)



ラジオ体操実施場所 朝 7 時～
(2023 年 11 月撮影)



図3 現在の生活空間・滞留場所としての利用（地理院地図より作成）

6) 空間利用の変化

ヒアリング調査から得られた過去の利用方法とその場所、そして管理事務所や石材店、花屋等の霊園周辺にある主要スポットの立地場所を図4に示した。

過去には、子供の遊び場や多様な生き物の住处として利用されていた「墓」と「木」の空間は、墓巡りや苔の採集等、利用目的が変化している。また、過去に野球をした場所が、現在はラジオ体操の場所になっていたり、同じ場所であっても違う目的で使われていることがある。このことから、霊園の各空間は、利用目的が限定されておらず、利用者の目的に合わせて利用方法も柔軟に変化していくのではないかと考える。

ヒアリング対象者の年齢層が異なっていたため、時代背景による違いも見られたが、共通する部分も多く見られた。多く挙げられたこととしては、霊園外周の万年塀が生垣に変わったことである。万年塀に囲われていた時は暗く、生垣に変わってからは明るく風通しが良くなったという声が多かった。万年塀があることで、霊園内外の境界線がはっきりとして、中は死者の空間、外は生きている者の空間とい

う認識が強かったという指摘があったので、霊園の中と外を完全に区切るのではなく、内外どちら側からも見えるようにすることで、物理的な境界線だけでなく精神面での境界線をぼかすことが出来ると考えた。霊園の通路を通り抜ける人が増加した理由としては、商業施設の開業や地下鉄等の移動手段の変化も考えられるが、生垣により境界線がぼやけたことも理由の一つであると考えられる。今後、霊園の再生計画が進み「利用しやすく、親しみやすい霊園」を目指す上で、境界線をぼかしたことは大きく意味のあることだと考えた。公園と霊園が共生する空間として、故人を偲ぶ場であるそれぞれのお墓は尊重しつつも、歴史を学べる空間や憩いの場としての側面も持つためには、境界線をどこまでぼかしていくかが大切である。

各年代の人々が遊び場として利用していた空間が、利用者の成長とともに通り抜けなどの移動としての空間や、自然や植物を感じる場として変化しており、空間利用の変化を見ることで、利用者の霊園に対する認識も明らかになった。

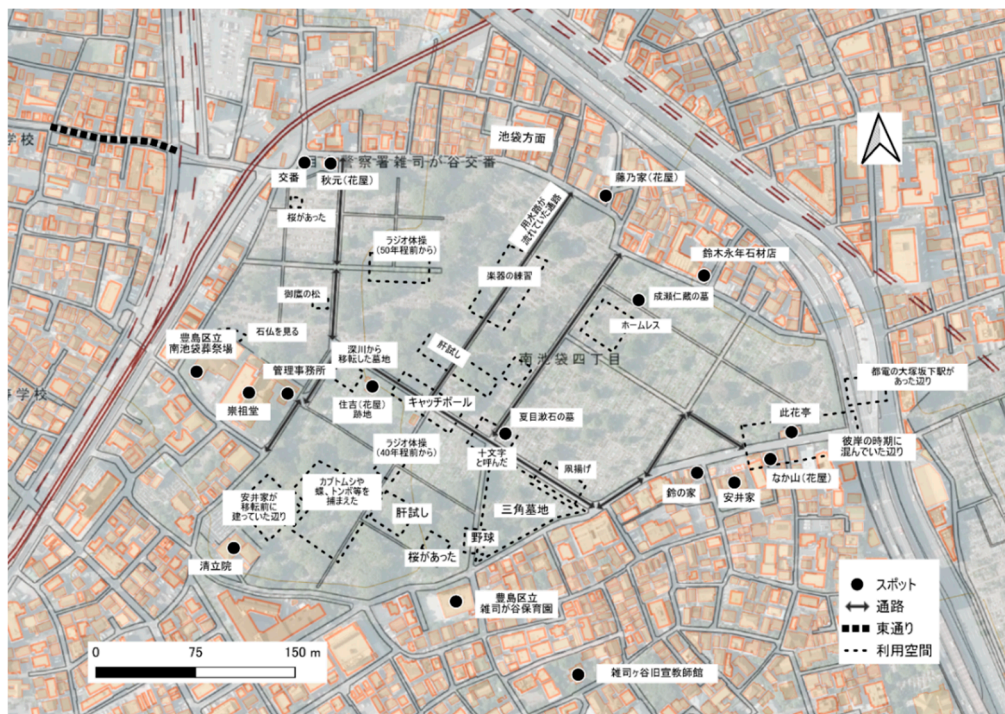


図4 主要スポットの立地と過去の利用（地理院地図より作成）

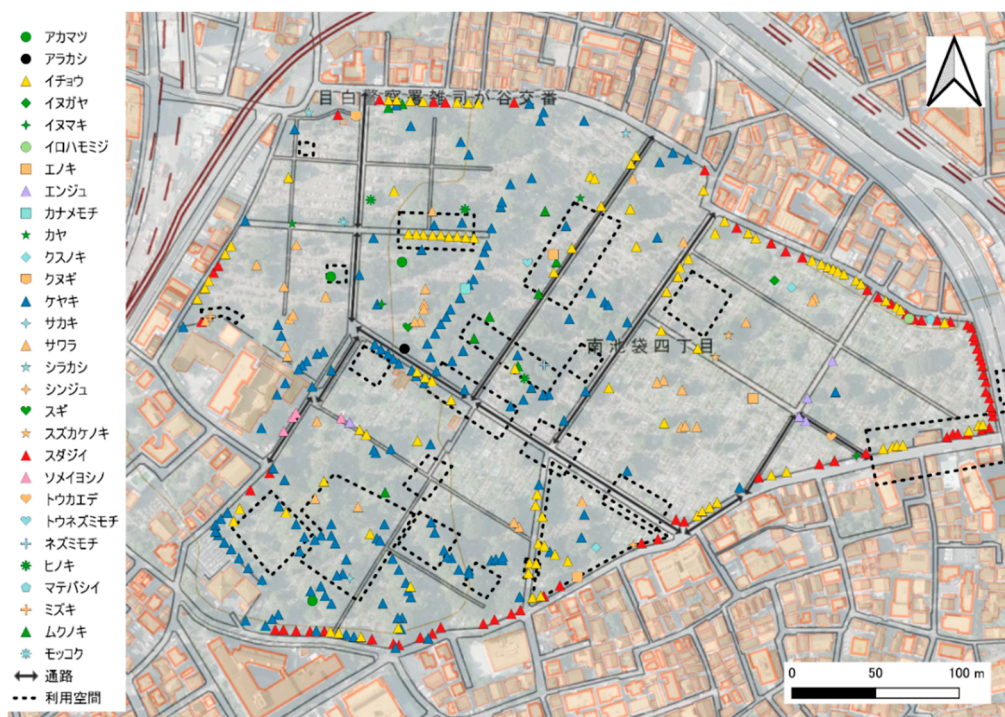


図5 樹木の位置と樹種（地理院地図より作成）

7) 霊園内の樹木

樹木マップと樹木調書³を基に作成した樹木の位置と樹種の間係を図4に示す。確認できる限りで29種類403本の樹木が植えられている。農家の屋敷林として植えられていたとされるケヤキの他に、東京都の木であるイチョウが数多く植えられていることが分かる。外周部に沿って植えられている木のほとんどはイチョウとスダジイである。

4. 結論

霊園は死者を弔い、死者と生者を繋ぐ場という印象が強いが、生者同士の交流の場にもなっている。例えば、ラジオ体操に参加している方々は、毎朝ラジオ体操があるということが原動力になっているそうだ。このように、霊園近隣住民やの近くに住む方々や利用する方々利用者にとっての霊園は、死者を偲ぶ場というだけではなく、子供時代の記憶を蘇らせる癒しの場であり、さらに都会の中でも自然を感じられるオアシス的な空間貴重な緑の空間になっていでもある。隣の池袋は人で賑わう街だが、

雑司が谷には雑司ヶ谷霊園があることで、静謐で穏やかな時間が流れている。近年は「墓じまい」も増えており、著名人の墓であっても「墓じまい」を余儀なくされることから、霊園の現況を記録として残すことには大きな意味があると考えた。霊園が今後時代の変化に合わせてどのように変化していくかは分からないが、今を生きる人々にとっては思い出に残る場所であり、生活を支える一部でもあると言える。

参考文献

1. 東京都建設局, 雑司ヶ谷霊園再生計画, 令和 5 年 2 月
2. セミの種類と好みの木まとめ! 効率的にセミを捕まえよう, <https://semitama.jp/column/437/>, 2023 年 2 月 13 日閲覧
3. 東京都東部公園緑地事務所, 株式会社中央造園設計事務所, 谷中霊園ほか 2 霊園樹木等調査委託 樹木調書 雑司ヶ谷霊園, 平成 15 年 12 月